econ. 2001
北海学園大学
経済学部報
エコン/No.4

国際社会のなかで生きていく君たちへ

**世の中のあらゆる場面で
国境を超えたつながりが進んでいく。
そうした状況を誰もが無視するわけには
いかなくなってきています。
そこで、4名の方に自らの海外での経験を交えながら、
北海学園大学の学生、大学について語ってもらいました。**

笠嶋　修次
1971年3月
神戸大学経済学部商学科卒業(商学士)
1997年8月
Wisconsin大学Madison校経済学部大学院博士課程卒業。
現在、本学経済学部教授、現代経済理論を担当

日本人も国際舞台で外国人と競争しなければならない
考えや疑問を相手に正確に伝える訓練を学生時代から行うことが必要だと思います。

司　会／まずは、学生達の背景にある海外の大学と日本の大学の違いをどなたかにご説明していただきたいのですが、まずマーク先生から。

マツネ／While on the surface the students appear quite similar to their North American counterparts, cultural differences quickly become evident. Perhaps one of the most startling differences is the commonly held attitude toward university education itself. While North American students generally expect to face difficult academic challenges in their tertiary education, some students here appear to view their university education only as the achievement of their high school studies. By that I mean that some students seem to feel that this is the reward for their previous efforts and that it is no longer necessary to place a priority on their studies. Please don't get me wrong. I'm sure that there are also a growing number of students who realize that while this may have been acceptable in the past, it is no longer realistic in today's competitive employment climate.

笠　島／私のアメリカの大学での経験から判断しますと、アメリカと日本では大学教育に対する考え方にかなり相違があるように感じます。一般に言われますように、アメリカの大学は「入るに易し」、「出るに難し」ことが特徴でして、これはUS News and World Reportという雑誌が毎年公表するAmerican College Rankingsという各大学の総合評価項目のなかの「大学合格率」と「卒業率」の数字をみるとわかります。アイビーリーグ校など一部の難関大学を例外とし、平均的なアメリカの家庭の子女が行くナショナル・ユニバーシティへの合格率をみますと、ざっとした感じ7割から8割の志願者は合格している。その反面、卒業率をみると、平均して5～6割程度の学生しか卒業できていない。また、一つの面白い特徴は、一部のトップ・スクールでは合格率は1～2割と低い反面、卒業率は9割以上と高いのに対して、入学し易いランキングが50位以下の平均的な大学では、卒業率は相当低くなっています。さらに、ランキングの低い大学ほど卒業率が低くなるという関係が読み取れます。このことは、アメリカの大学では、大学卒業学位を得るため学生が達成しなければならない絶対的な最低水準が、大学全体のコミュニティの中で存在することを示唆しているように思われます。私もアメリカの学生の姿を横で見てきましたが、日曜の午後あたりから図書館に行って翌週の授業の予習を始め、それから木曜の夜12時頃まで毎晩遅くまで、授業の後に復習と予習を繰り返すわけです。そして、金曜日に授業から開放されると、パーティなどで羽目をはずしてリラックスする――。

司　会／そうしたいろいろな背景の違いを前提にした上で、海外の学生と日本の特に北海学園大学の学生と比較して、学習態度などについて、皆さんどのような感想をお持ちでしょうか。

二　通／教養ゼミ(旧カリキュラム)がまだあった時に、学生たちに論理的な文章の書き方について指導しました。そのときに、授業中に問いかけても全然学生が発言しない、彼らはそれがわからないのではなくて、口火を切ることにすごくプレッシャーを感じるというんですね。人文学部の授業のときに、毎回出席カードのかわりに、その授業について今日わかったこと、感じたこと、質問とかを小さな紙に書いてもらって集めてみると、そこにはいろいろなことを書くんです。個人的に先生に対して１対１でお手紙のように。

マツネ／As North American students are generally more individualistic, they do not hesitate to demonstrate this nature in their

classes. It still astonishes me when I observe some of the brighter students in my courses here at Hokkai Gakuen University who are almost embarrassed to demonstrate their abilities and English skills, just because they don't want to stand out from the group. This would definitely not be the case in a typical Canadian university classroom. Instead to would be closer to the opposite, where the classroom environment is almost competitive and students are eager to demonstrate their superior understanding or ability.

カリュジノワ／外国人の先生方の日本の学生に対する印象としては、反応がないとか、質問してもらえないとか、自分の意見を述べれないなどがあります。その理由としては、日本人の考え方では、相手と異なった意見を言うと、相手の人格を否定することになると言われました。ただ、それは日本では通じますけれども、国際的な活動をする場合には、自分の意見を持っていないと誤解されますね。

笠　島／アメリカの大学では学生がクラスで発言しないと、その学生は能力がない、あるいは少なくとも授業の準備をしてこなかった、というふうに見られるのですね。質問などでアクティブに授業に参加する学生は教師の印象もよくなり、就職や大学院進学の際、好意的な推薦状を書いてもらえるなど、なにかと有利でして、学生の方もそれをわかっているのだと思います。アメリカの社会全体が、極言しますと自己主張しない人は能力がない、というように理解される社会システムになっているような感じがします。日本人の場合は、人前で強烈に自己主張するよりは、何か実際に優れた物を作ったり、体を動かして良い結果を出すことによって認められるというような文化的な風土が昔からありますので、それが教育における学生の授業中の態度の日米間の相違となって現れてきている面もあるのでないでしょうか。ただ、日本経済の国際化はこれからも一段と進んでいき日本人も国際舞台で外国人と競争しなければならない局面が一層増えていくと思いますので、授業中に積極的に発言するなどして自分の考えや疑問を相手に正確に伝える訓練を学生時代から行うことが必要なのだろう、と思いますね。

日本の場合、勉強するのは学生の責任みたいなことがあると思うのですけれども、アメリカやカナダの大学では学生のスタディスキルズというか、そういうものに対しても

援助を行うという体制になっているのはいいなと思いました――

二通　信子
1970年3月　東京教育大学教育学部卒業
1990年4月～1993年３月　北海道大学留学生センター非常勤講師
2000年9月～2000年12月　レスブリッジ大学交換教員
現在、本学経済学部助教授、日本語会話等を担当

二　通／高校時代までというのは、ディスカッションするとかいうことは余りなかったと思うのでやり方もわからないのに加えて、そういうことが、高校までの勉強ではすごく評価されてこなかったと思うんです。大学に入ってから学習姿勢を変えることを学生の側にだけ求めるのはちょっとかわいそうだなという気もするのですけどね。

笠　島／アメリカやカナダの小・中学校、高校でどのような方法で教育が行われているかよく知りませんが、おそらく先生が学生の自主性を発揮させるような授業の方法、例えば学生に質問しながら授業を進めていくとか、授業に積極的に参加するような環境作りを先生が工夫しているような授業を行っているのでないでしょうか。その延長線上で大学教育では、もう少しクリエイティビティとかオリジナリティを育てたり、発揮できるような勉強をさせるシステムができているのでないかと思います。

マツネ／In Canadian universities it is common for students to take undergraduate level courses specifically focused on areas such as academic writing or research methods. Generally I think undergraduate courses in Canadian schools place many more constant demands on the students through regular assignments, reports or ACTIVE participation in class discussions. The discipline developed from this continuous assessment more often than not leads to the gradual improvement in study and writing skills as well as a deeper understanding of the course's content.

二　通／レスブリッジ大学に行ったときに、ライティングセンターというのがありまして、そこのお話を聞きに行ったんです。それは大学の各学部から予算を出し、専門の先生に依頼してスケジュール決めてそこに来ていただき、レポートの書き方などを相談したい学生が予約して行くというところなのですね。なぜこういうセンターをつくったかという目的の中に、学生の定着率を高めるという項目があったのです。卒業率が低いというのは、大学としての評価にもかかわるらしいんです。日本の場合、勉強の方法は学生自身が考えることとなっていると思うのですけれども、アメリカやカナダの大学では、学生のスタディスキルズというか、そういうものに対しても援助を行うという体制になっているのはいいなと思いました。

カリュジノワ／　援助というのは、必ずしも予算的なことだけではなくて、一つの授業のやり方というより、その学習に対しての意欲を育てるような目的のものですね。大学側でテーマを決めて学生に提案して、それをただ調べてレポートを書く段階で終わらずに、それを発表する場として学術討論会や学生カンファレンスというものがあります。それはロシアの大学でもあるんですが、その会議で学生たちが発表して、お互いに質問したり、それこそフィード・バックを受けたりして、参加者で、テーマが一番面白かったもの、テーマのまとめ方が一番よかったものなどを決めます。それを一度おこないますと、もう次の年には学生から今年の会議はどうなりますか、今年の会議のテーマはどうしましょうかといった積極的な申し出があります。ロシアの大学は、ピュアサイエンスなどの基礎学問的な大学、教育大学、医科大学といった応用的実績な大学に分かれますが、ただ教育大学の学生だからといって、何かを調べてみたい気持ちがないわけではありません。ただ、それは必ずしも科学的な発見をしたことを発表するのではなく、調べてまとめて、それをほかの人に伝えるつもりでやる。それを十分な目的として認めることは非常に効果的です。それによって学生の中に科目に対して興味がわいてくるのですから、いいことです。

司　会／そうした制度的なことに加えて、教員自身の教え方というところも問題になりますよね。

マツネ／While it is true that the traditional role of teachers was to impart information, I believe that technological advances are changing our roles as educators. While the conventional lectures will continue to provide students with valuable knowledge and information, I also think that education has now moved into a global environment, where students can access current information from information resources anywhere in the world. I think the students in our faculty are now getting firsthand exposure to a wealth of information that was previously inaccessible to students a few short years ago. In addition to a theoretical background, students can now easily find and apply authentic data and information in their research and studies. Their exposure to global resources in their specialized area of studies, culture and language is hopefully providing them with a more comprehensive educational experience than in the past.

I'm particularly impressed with the students who return from experiences abroad, whether the purpose was pleasure or studying.

More often then not, that exposure stimulates their interest in foreign languages and cultures.

国際交流体験を北海学園大学の学生もでき いい意味で活性化できるかもしれませんね

マツネ　マーク・トーマス
1986年5月　アルバータ州立大学卒業
1999年4月　南クィーンズランド大学大学院言語学習研究科CALLTEFL専攻修了
現在、本学経済学部助教授、オーラルコミュニケーション等を担当

カリュジノワ　マリーナ
1993年6月　ノボシビスク国立総合大学人文学部言語学科卒業
2001年1月　北海道教育大学札幌校教育学部研究生
現在、北海学園大学経済学部のゼミにオブザーバーとして参加

司　会／再び学生の話しに戻りますが、うちの学生、大体７割から８割くらい札幌圏ですよね。東京の大学へ行っていると、いろいろな各地から来て、そうするとまず同じ日本人でも違う文化の人たちがいることを認識する。そこである程度の競争意識みたいのが芽生えてきて、そこから何かいろいろ話す中で、問題意識とか出てくるのですけれどもね。

マツネ／I'm particularly impressed with the students who return from experiences abroad, whether the purpose was pleasure or studying. More often than not, that exposure stimulates their interest in foreign languages and cultures. I've observed numerous students who appeared "very average" in their English Oral Communication studies prior to their travels, but return to take active leadership roles in subsequent courses.

笠　島／マツネさんが言われたように、これまで自分が生活してきたのとは異なる環境で生活するのは、とても大事なことだと思います。学生たちは、今まで生活し経験した社会や教育のなかで自分の思考や行動のパターンが作られ、その中で順応してきたのだと思うのですね。でも、海外の大学に行ったり、外国からの留学生と付き合ったり、これまでとは違う世界を見たら、ああ、こういうふうな社会もライフスタイルもあるのか、こういうふうな勉強の仕方もあるのかと、その違いを素直に受け入れ順応してゆくのではないでしょうか。そうした柔軟な順応力を北海学園大学の学生はもっていると思います。

二　通／たまたまこの大学の場合は、周辺から来ている人でもう成り立っているということで、学生がせっかく大学に来ても、いろいろカルチャーショックを受けるチャンスが少ないという点があるかもしれないと思いますね。だから留学生をもっと受け入れるようにして、もっと視野が広がるような場にするということを考える必要があるのではないかな、と思います。

カリュジノワ／そうですね、大学として北海道とか札幌のよさを世界にアピールして提携校を増やし、学生が海外の提携大学へ留学する。また、札幌とか北海道の魅力に引かれて留学生がたくさん来ることも期待できると思います。そうしますと先生方が言われたような国際交流を北海学園大学の学生もでき、いい意味で活性化できるかもしれませんね。

マツネ／Speaking about the foreign students at this university, I think it is wonderful that many of them are enthusiastic about sharing their cultural perspectives with the other students. They can act as valuable role models by helping their Japanese peers to develop a greater and broader appreciation of the world around them. In that way, I hope our students can grow to become active global citizens in this 21st century.　（6月7日、学内応接室にて取材をさせていただきました）

一般入試だけでなく、いろいろな入学試験もあるよ！

●一般編入学（第Ⅰ期）試験
出願期間：平成13年10月　1日（月）～10月　9日（火）
試　験　日：平成13年10月21日（日）
合格発表：平成13年11月　5日（月）

●社会人特別編入学試験
出願期間：平成13年11月　1日（木）～11月13日（火）
試　験　日：平成13年11月25日（日）
合格発表：平成13年12月　7日（金）

●大学院経営学研究科経営学専攻修士課程（第Ⅰ期）入学試験（社会人特例受験も含む）
出願期間：平成13年　9月　4日（火）～　9月10日（月）
試　験　日：平成13年　9月29日（土）
合格発表：平成13年10月10日（水）

●大学院経済学研究科経済政策専攻修士課程（第Ⅰ期）入学試験（社会人特例受験を含む）
出願期間：平成13年　9月25日（火）～10月　1日（月）
試　験　日：平成13年10月16日（火）
合格発表：平成13年10月23日（火）

「外交講座」開かれる

去る平成13年6月29日（金）、60番教室にて「国際事情」の講義（経済学部対象）時、外務省より経済協力局審議官・滑川雅士氏を講師として派遣していただき、『日本の経済援助（協力）外交について：その実績と問題点』をテーマに外交講座を行ないました。講義を履修している学生のみならず、この講座に興味を持つ多くの学生の参加がありました。

北海学園大学経済学部 2001年度市民公開講座

テーマ：「モデルなき時代への挑戦」

●日程／9月22日、29日、10月6日、13日及び20日（いずれも土曜日）午前10時40分～正午

●講座内容と講師
1. 少子高齢社会の雇用問題（岡田行正助教授）
2. 地域の国際化―外国人との共生をめざして―（二通信子助教授）
3. “自分”がアブナイ時代の心理学（小島康次教授）
4. システムとしての家族（伊藤淑子教授）
5. 健康づくりを10倍楽しむ方法―ウェルネスからみた健康と運動―（竹田憲司教授）

●受講資格／18歳以上で、講座内容に関心のある方

●費用（資料代）／3,000円

●● ともに問い合わせは経済学部事務室まで ●●

講義紹介

財務諸表論

高木　裕之

司　会：講義を受けて関心や興味を持った点を教えてください。
学生Ａ：数字やデータの背景も説明してくれるところですね。
高　木：会計というのは文字と数字から成り立っています。文字と数字があって、どっちが規定的かというと数字なんですよ。会計ばかりは数字がないとダメなんですね。講義の流れは、やっと財務諸表が出来てきたばかりの所ですけど、例えば減価償却を捉えて定額法と定率法のどっちを採用するかということを問題にして、その根拠を示すことで簿記から会計学的な思考の転換をやっているんです。一学期の間は、個別会計を中心にやる。外部に向けた情報だけを見てゆくんだったならば連結会計を先にやっても良いのですが、個別会計は連結会計をやる大前提なのです。だから、個別会計が出来ないと連結会計ももちろん出来ないわけで、財務諸表論という講義の性格からいくと、少なくとも個別会計で資産とか負債とはどういうものか、そこで出てくる評価とはいったいどういうものか、そこのへんを押さえておかざるを得ない。それをベースに連結会計の方に移ってゆくということになりますね。
学生Ｂ：実務的な面と同じようなことをここで勉強しているんですけど、やってる視点が違うんで、こういう考えもあるんだって画期的というか驚いたんです。
高　木：今の話ね、ちょうど私も学生時代に思ってました。私の恩師と巡り会って、その時に「こ～んな会計があるのか」つてビックリしました。それまでとは見方が全然違って、こういう面白みが学問にはあるんだなあって。だから先生に出会うとか、図書に出会うというのも非常に大切なことですよね。
学生Ｃ：大学に来る前はただ単に簿記の資格が欲しいってことで、そういう学校に行ってたんです。先生の講義を受けて企業会計の奥深さを知って、毎回難しくて大変なんですけど、すごく刺激になります。
高　木：なるべく皆さんの刺激になるような授業にいていきたい（笑）。教師の側としても質問があると張り合いが出てくるんですよね。次こうしようとか、こういう資料を出そうかって。でもあれですよね。“なんで右に書くの左に書くの？”“何で借りなの貸しなの？”って考え始めたら検定試験は受からない。それだけで1年の講義になっちゃうから（笑）。でもねえ、ホントは知識欲ってのはそういうところから出て来るんでしょうけどねえ。
学生Ｄ：先生は企業だけではなく、国や自治体など非営利団体がバランス・シートを作ろうとしている点はどう思われますか。
高　木：国も自治体も組織ですから組織としての効率性や有効性、能率は重要な要素ですよね。1つの組織として捉えれば、もちろん企業で行われている会計をそのまま転用することは出来ますよ。ただ組織ではありながら、利益や収益性を追求する営利団体ではないので、別の価値判断を作ってやっていかざるを得ないでしょうね。いずれにしろ、作り出された価値がどれくらいなのかを計算することは非常に重要なことです。どれだけ社会に対して価値を高められるか、その価値と言った場合に低いのか高いのかを計算する用具として会計が求められているんだと思いますね。
司　会：講義を通じて学生に最も伝えたいことは何ですか。
高　木：物事には一面があって、二面があって、三面もあると、いうところを理解してもらいたいかな～っていうところですね（笑）。何でも効率性や収益性で片が付くのか疑問に思います。企業は最終的に利益追求が目標であるいうのはわかります。大事ですけど、ただ利益だけを追求するというのも味気ない気がしますね。人間ってそういったお金だけの問題じゃないし、企業会計の背後にある本質なるものを見極めることと、企業会計が何のためにあるのか、その真実を問うというのが、講義の一つの目的かな、と思います。もう一つは科学である以上、人間の幸福に幾らかなり貢献したいと思ってます。企業会計は実践的な学問ですから企業経営に役立つものでなければならない、というのはわかりますけど、ホントにそれが真理として成り立つのかどうかと言えば、別の所に行かなきゃいけない（笑）。

（6月14日、財務諸表論（2部）の授業中に取材させていただきました）

国際事情

細見　眞也

司　会：この国際事情という講義を受けて、いかがですか。
学生Ｊ：この４月に中国から留学して、最初どういうものかわからなかったのですが、先生の授業をきいて関心が持てるようになりました。毎回の講義にテーマがあり、いろいろな面白い事を交えながらの説明がいいです。今日はレポートの書き方について、特に、どういうテーマがテーマになるのかの説明も学習に役立ちます。
学生Ｋ：この授業は、経済をより広く説明していることが特徴だと思います。私は、先生がアフリカの服を着て講義をされたのが印象に残っています。
学生Ｌ：最初は世界の歴史についていろいろ勉強していくと思っていましたが、日本のこともやっています。アフリカとかその辺の文化についても、もっと知りたいと思ってます。
細　見：最初に私のアフリカの経験について話をしていきましたが、これからもガーナ、エチオピア、ケニアの具体的な経験などテーマを広げていきます。ただ、アフリカとかその他世界の事を知るのは大事だけれど、日本の事を改めて理解することも重視しています。
学生Ｍ：僕は、今日の講義で出されたレポートのテーマは法律関係、特に森有礼の「学校令」と義務教育の始まりについて関心があるので書こうと思います。
細　見：私のアフリカ経験からこういうテーマに繋がっていくのです。ここにも三人の中国人留学生がいますが、私自身、ガーナにいたときに「チャイニーズ」と間違われ、つい「私は文明人の日本人だ」と反感を持った。しかし、振り返ってみると、なぜ自分はそう考えたのか疑問に思い、そこには偏見があると気付きました。では、それがどうして植え付けられたのか、を省みるとこういうテー

国際経済論

海保　幸世

学生E：先生は板書するとき縦書きですよね。それには何か意味とか…(笑)。

海　保：意味はないですけど、書きやすいって事で(笑)。私としては板書するのは肩が凝るし健康のためにはしたくないんですけど、板書するのとしないのでは試験をパスする率が一割くらい違うんですよ。でも、だんだん字が小さくなってくるんだよね。

学生F：この前の講義も一番前の席まで移動しました(笑)。

海　保：そうそうそう！　興味を持って前の方に来て聞いて欲しいし、もっと自分の考えや疑問を大事にして、講義でもテストでもぶつけて来てもらいたいですね。こんなこと聞いて恥ずかしいとか思わないで、基礎的なことを嫌がらずに一つ一つ押さえてゆく。一番面白くないかも知れないけど、基礎的な概念とか理論とか、比較的単純なことを疎かにするとわかんなくなっちゃうわけね。

司　会：講義を受けて、関心を持った点を教えてください。

学生G：前回の講義で国際収支についてやりましたが、一年間の流れはどうなってるんですか。

海　保：グローバルな経済、企業というのをわかってもらおうというのが主旨で、国際経済の前に国民経済とはいったい何から出発して、世界と国民経済の間を繋ぐものとして国際収支をやったわけです。それを踏まえた上で二学期では外国為替など国際金融をやろうか、と考えてるわけです。今は国際経済論の基礎の基礎なんです。一学期はどうしても理解しておいてもらいたい重要な基礎的なことをやるんで、学生諸君は今一番しんどい時期かも知れないね。二学期になってカレントな問題。昨年の後期は、多国籍企業とNAFTAを取り上げてグローバリゼーションの本質とは何なのか、そういう問題意識から本家本元のアメリカがなぜNAFTAを結成していったのか、それがホントの意味で具体的に国境をなくすことなのか逆に国民経済の拡大なのか、極めて面白かったと思うんだよね。だから前期で、もういいやって欠席し始めるとだいたい落ちるね。それに昨年と同じような問題は出さないからね(笑)

学生H：もっと生活に密着したようなこともやってほしいんですけど。

海　保：やっぱりね(笑)。でも、最近の「ユニクロ」もそうですけど、外国への生産委託や企業の多国籍化によって生産拠点も海外に移動していき、国内の生産基盤や雇用基盤そのものが縮小してくる。かつての下請関係もどんどん崩壊して企業城下町が消失したり地域の風景も変わってきてるよね。グローバルって言えば良さそうに思えるけど、直接投資が実際に自分たちの雇用にどう影響するか、そのメリットとデメリットなど、そういう国際経済的な関係に入り込むのは、やっぱり二学期だよ。その前にどうしても国民経済とは何か、これを理解しておいてもらわないとね。

学生I：正直に言って自分の就職に役立つようなことで、具体的に大学で何を学べばいいかわからないんです。将来の日本を見る一番手っ取り早い方法とか無いんですか。

海　保：それは学生諸君に共通する関心だと思うんですよね。就職とか将来のこととかに私の講義がどこまで答えられるかって問題だよね。う～ん。私の講義には二つの側面があって、一つは実務的な側面を身に付けてもらうことと、もう一つは中・長期的な判断力だね。国際経済論の細かい事柄を覚えてもらうことも大切なんだけど、図表とかを読みとって過去と比較しながら現在の状況を的確に把握し、どう分析してどう判断するのか、そういう能力を身に付けてもらいたいんですね。特に経済のグローバル化は流れとしてハッキリしていますけど、その中で日本や北海道が置かれている状況がどうなのか、皆さんの就職先の見通しも含めて、講義を聞きながら判断してもらいたいわけ。分析力とか判断力とかを身に付けて、出来たらやはり一つの生き方を試行錯誤し模索してもらえれば、講義する方としては有り難いし、これ以上のことはないね(笑)。

(6月11日、海保ゼミ(1部)の授業中に取材させていただきました)

マになってくるのです。明治維新以後の日本の教育、また、日中戦争や第二次世界大戦などの中で、そういう意識が植え付けられた。ですから、その背景を探究することも国際事情を考えるには重要なテーマです。

学生N：私は、国際事情については、先生はやさしく親切で。特に留学生の場合は、わからないことが多いのに親切に相談にのってくれるので、受講してみてよかったと思う。

学生O：アフリカの話が聞け、普段接するアメリカや中国などの話は聞くけど、野口英世のことも知らなかったので、この授業は参考になっています。

細　見：私の講義の目的は、学生がいろんなことに疑問を持ち、感じ、そして考える力をつけることです。何事にも興味・関心・疑問を幅広く持ち、その疑問を自分で本を読んで、それを人に伝える。レポートに書いたり、言葉で話したり、ディスカッションしたり、自分の考えを人に伝える経験も大事だと考えています。ですから、アフリカの事といってもその知識を増やすよりは、そうした国際的なことを考えながら考える基本的な力を身につけることが非常に大切です。

(6月15日、国際事情(1部)の授業を取材させていただきました)

私の履歴書

▲中学時代、地元の音楽コンクール出場の時の1コマ

【岡田 行正助教授：経営労務論】

経歴

1967年 ── 広島県尾道市に生まれる
1992年 ── 広島修道大学商学部経営学科卒業
1994年 ── 広島修道大学大学院商学研究科経営学専攻博士前期課程修了
1997年 ── 広島修道大学大学院商学研究科経営学専攻博士後期課程単位取得
1997年 ── 北海学園大学経済学部専任講師
1998年 ── 北海学園大学経済学部　助教授
現在に至る

●主要著書

「O.Tead&H.C.Metcalfの人事管理論～personality概念を中心として～」『経済論集』第46巻第3号、北海学園大学経済学会、(1998)
「研究開発部門の変遷にみる役割と課題　～人的資源開発管理からの一考察～」『工業経営研究』Vol.13、工業経営研究学会、(1999)
「アメリカ人事管理論の発展過程に関する一考察」『経済論集』第48巻第2号、北海学園大学経済学会、(2000)
「アメリカ人事管理の生成要因に関する一考察」『経済論集』第48巻第3・4号、北海学園大学経済学会、(2001)
「日本企業における研究開発技術職人事の問題点とその要因」『経営学の新世紀〔経営学論集 71〕』日本経営学会編、千倉書房、(近刊)

●現在の研究テーマ

人事管理論の発展史研究と人的資源管理の現代的課題に関する研究

ホームタウン

私は広島県は尾道市出身なのですが、生まれてから小学校２年生までは、父親の仕事の関係で瀬戸内海に浮かぶ因島市で、その後、高校時代までを尾道で過ごしました。尾道といえば、坂の多い町、寺の多い町という他に、作家の志賀直哉や林芙美子、また最近の学生さんはご存じないかもしれませんが、大林宣彦監督の映画：尾道三部作の舞台としても知られている所です。大林監督は、高校の大先輩にあたり、高校３年生の夏に、母校で映画『さびしんぼ』を撮影していたのを思い出します。これら映画のお陰か、尾道に帰省する夏や冬には、市内の至る所で多くの観光客を見かけます。近年、尾道から四国の今治を結ぶ“しまなみ海道”が開通しましたが、瀬戸内海には、小さな島が多数点在し、今でも小さなフェリーが通勤・通学など日常の足として利用され、時間の流れが緩やかで、またどこかノスタルジックな印象を残す、そんなのどかな所です。

学生時代のこと

浪人後に大学に入学したものですから、大学の頃は、常に焦燥感に苛まれていました。だから、そこからの脱却をアパートで一人暗く本を読みあさることに求め、悶々とした時期でした。いわゆる楽しい大学生活とは程遠い生活でした。時間が無性にもったいなくて、アルバイトなども夏や冬だけ短期集中的なものばかりやってはそれで食いつなぐという生活で、それだけに風呂付きのアパートに越したとき、また電話がやっとついたときやエアコンがついたときは、本当にうれしかったですねえ(笑)。その後、引き続き大学院に進んだのですが、今振り返ってみますと漠然とですが、小学校６年生の頃には自分はこういう道に進むのかもしれない、という予感めいたものがあったような気がします。というのは、私が小学校６年生のとき、ちょうど叔父が東京で大学院生でして、その叔父の四畳半の下宿に１週間ほど連れて行ってもらったことがありました。その１週間程の間、毎日昼間は生まれて初めての東京を叔父に観光案内してもらい、夜になると下宿で黙々と机についている叔父の姿を子供ながらに見ていて、自分もいずれこういう道に進むのかもしれないと思った記憶があります。経営学を勉強したいというのは、中学から高校時代にかけてその手の本を読み興味を持ち、すでに自分の中で決めていましたので、大学院そして研究者の道に進むことには迷いはありませんでした。でも、大学院時代は、大学時代とはまた違った意味で時間に追い立てられていたような気がします。勉強・研究時間の確保は勿論ですが、実家からの仕送り等は全くなかったものですから、奨学金の他に、塾の講師や専門学校の講師、予備校の講師など色んなアルバイトをしました。ひょっとすると今の私の大学でのどぎつい広島弁での講義も、この頃の影響を多分に受けているせいかもしれません。

研究テーマのこと

日本の企業をみていくとき、日本の社会構造そして企業社会の構造は、企業のあらゆる制度等々に多分に影響を与えていると思われます。その中で人々の生活という観点から企業の人事労務管理がもたらす問題をみていくと、その企業で働く本人だけにとどまらずその家族にまで及び、今日の日本で社会問題化しているいくつかの現象の原因には、直接・間接的に多くの場面で人事労務管理が関わっているといえます。あえて誇張して言えば、人事労務管理のあり方によって、人々の生活は幸福にも不幸にもなるという側面があるということです。企業社会に生じる様々な人間的な軋轢は、企業が企図する「働かせ方」と労働者が期待する「働き方」とのギャップから生じ、今日の人事労務管理は、こうした人々の軋轢を削減すると同時に、企業目的達成に貢献する労働成果の確保といった困難な課題を抱えているわけです。講義ではこれらのことを主なテーマとして取り扱っています。また、これらのことをベースとしながら個人的な研究テーマとしては、日本に多大な影響を与えたアメリカ人事管理論・人的資源管理論の系譜的研究、そして現代の企業におけるＲ＆Ｄ部門での人的資源管理の問題について研究しています。

趣味のこと

３歳の頃からヴァイオリンをやっています。ただ３歳の頃からですから、音楽が好きとかヴァイオリンが好きということで始めたわけではありませんで、物心が付いた頃にはすでにやらされていた、というのが正直なところです。私は田舎出身なものですから、子供の頃は友達から珍しがられたり、練習しないと外にも遊びに行かせてもらえなかったりで、子供の頃は随分と嫌な思いもしました。そうこうしながらボチボチ弾けるようになってくると、今度は親の方が、「そろそろ辞めたら？」なんて言い出すわけですよ。となると、逆に今まで続けていたのに…、と意地でも辞めたくない、となるわけで高校３年生までレッスンに通っていました(笑)。高校時代には、学校のクラブには入らず、地元のオーケストラに入っていました。そのオーケストラのメンバーの人達は、大人ばかりで高校生が珍しかったということもあってか、随分可愛がってもらいました。またそれが当時楽しくて、学校の勉強もせずに、オーケストラに熱中していました。大学院の頃にも、色んなアルバイトをしましたが、その中でも少し変わったアルバイトで、セミプロのオーケストラに入っていました。入団オーディションにたまたま受かりまして、周りのオーケストラのメンバーは音大出身者ばかりでしたが、また別の世界が垣間見られたという点では貴重な体験だったと思います。札幌に来て５年目ですが、まだオーケストラの活動も始めておらず、そろそろ再開したいと考えている今日この頃です。

学生諸君へ

最近のデータによると文科系学部の大学生の７～８割が、自分が将来何をやりたいかわからない、ということとか。驚くべき数字ですが、私も昨年一昨年と就職委員で学生の個別面接をしているとき、これと全く同じ印象を受けました。折角の大学時代、これだけまとまった時間は今後の人生の中でもなかなか持てません。と考えると、色んな自分の可能性を模索し、自発的に果敢にトライする絶好の時期が大学時代だと思います。「自分何が出来るか」と考えるのではなく、「自分は何がしたいのか」を早めに見付け、それに向けて前進してもらいたいと思います。

▲昨年度ゼミ卒業生との集合写真（中央が私）

▲ユジノサハリンスクにて

【池田　均教授：経済地理学】

1938年9月20日－札幌市に生まれる
1966年――――北海道大学大学院農学研究科農業経済学専攻修士課程修了
1969年――――北海道大学大学院農学研究科農業経済学専攻博士課程単位取得退学
1970年――――北海道立総合経済研究所水産経済課研究員就任
1988年――――北海道企画振興部経済調査室主任調査専門員就任
1989年――――北海学園大学経済学部　助教授
1990年――――北海学園大学経済学部　教授
現在に至る

●主要著書

「サハリン州の社会経済構造」『北海学園大学経済論集』第46巻第2号、北海学園大学経済学会（1998年）
「郷鎮企業の経営実態に関する研究」『北海学園大学開発論集』第62号、北海学園大学開発研究所（1998年）
「サハリン州の社会経済史」『サハリン州の総合研究』第1集、北海道大学教育学部（1999年）
「サハリン州の経済（Ⅰ）」『サハリン州の総合研究』第1集、北海道大学教育学部（1999年）
「サハリン州民形成史」『サハリン州の総合研究』第2集、北海道大学教育学部（2000年）
「北海道漁業の軌跡と課題」『概説北海道産業史』日本政策投資銀行（2000年）
「新北海道漁業史」北海道水産林務部（2001年）
『地域開発と地域経済』日本経済評論社（2001年）

●現在の研究テーマ

地域の社会・経済構造に関する理論と実態

きっかけ

研究を志したきっかけは、かなりはっきりしていて、たしか高校生のころだったと思うのですけれども、東京に叔父がいて、千葉県の九十九里浜に連れて行かれた時のことでした。そしたら「おまえ、この海見てどう思うか」と言う。その頃は問題意識もないから何も思う所もなくて返答出来ずにいると、「じゃ、おまえ、海という歌知っているか」と言う。「我は海の子」という、「煙たなびく苫屋こそ」ていうね。そして「この九十九里浜に苫屋が見えるか」と問われた。つまり、漁村というのはほとんど解体して、貧しさのどん底にあるということをそこで教わった。進路を決めかねていたこともあって、「じゃ、水産のことをやってみるか」ということになって大学も水産学部に進むことになった。大学院進学では、当時水産学部に大学院がなくて農学部に移籍をして入学し、農業と漁業という第一次産業を主とした研究をすることになった。最近では、漁業とか農業というだけではなくて、地域としてとらえるという形に次第に変わってきた。地域問題とよく言っているけれども、私はどっちかというと、都市と農村の両方に視点を当てていく。ただ北海道の場合、都市というよりも農山村の方が多いわけで、北海学園という大学にいる限りは、どっちかというと農山漁村地域ということに視点を当てざるを得ないだろうと思っている。

アジアと北海道

私はサハリンのことや中国のことを最近ずっと研究テーマとしてやってきた。きっかけは私の教えた卒業生や知人に北海道の中小企業の社長が結構いて、彼らのうちの何人かが中国と商売やっている。北海道人がもう国家の枠を乗り越えて、具体的に地域間の交流を経済的に始めている。中国で私がやっているのは東北三省だけど、そこが一番北海道に近いし、北海道の人たちも、そこで仕事をやっているわけですからね。そこで国家間の貿易という視点というよりは、むしろ地域間の具体的な人々の交流というか、それを通じた経済交流の実態とかを調べる必要がある。教え子たちがこれから商売やっていく上で、あそこはこういう地域だということを学問的に明らかにしておくと、それを読んで、見て、勉強して、彼らがそれなりの地域間交流をやっていく上で、土台を提供出来るのではないかと私は思っている。うちの卒業生たち含めて北海道民が、北海道だけでは不況でだめだということで、一番近い韓国なり、中国なり、サハリンなり、極東ロシアなりで、何かをやろうという意気込みは持つわけですよ。そのときに、大学が相談に乗れるような蓄積を持つ必要があるというふうに思っている。だから、東北三省だけでなく韓国にも、サハリンにも興味あるから、たとえ予算がなくても自費で休みに行くようにしている。

学生のみなさんへ

これも私の持論ですけれども、ゼミの学生に必ず言うのは、「大学来て、授業受けて、勉強だけしている学生では困る」と。社会的なボランティア活動とか、それが向かないと思うのであれば、せめて部活。「スポーツであれ、文化活動であれ、みんなと力を合わせて何かをやっていくような活動を学生時代にやりなさい」ということを言っている。これは私自身も山が大好きで、高校、大学とずっと山岳部だった。そのころの友人というのは今でも友人でいるし、何かあれば相談し合える本当の友達だと思っている。それと、大学院に入ってからは、国際ボランティア活動。かつての日ソ協会で、今は日本ユーラシア協会というけれども、そこの団体を今でも続けている。結局、学生時代はボランティア活動と山登りと、それに３分の１が勉強という感じだった。そういう社会活動というか、ボランティア活動というのはやっぱり自分にとって、いろいろな視野を広げる意味で役立ったと思っているし、だから「何だっていいから、やっぱりみんなと一緒に活動しながら、多少ともこの世の中が明るくなるような方向を見つけていけるのであれば、それをやってくれ」ということを私は必ず言うようにしている。それから、求人で見えた会社の責任者とお会いした時も、みんなと仲良く明るくやれない学生は敬遠すると。で、どうしたら仲良くやれるかというと、やはりそういう経験がないと、と言う。

▲モンゴルでのパオ生活

これから

今回、開発研究所で有珠山の研究テーマにしたのだけど、個人的には被災者のもとに調査に行くというのは、非常にやりづらいと最初は考えていた。1995年の時、サハリンで大地震あって、一つの村が全滅してしまった時、ユーラシア協会でカンパ集めて、州知事に渡しにいったんだけど、そのときに、被災者、親が死んだ子供たちがたくさんいるわけですよ。その子たちが収容されている場所が旧ソ連時代のピオネール・キャンプだった。そこに慰問に行った時に見せてもらった絵が、真っ黒なひどい絵ばかりだった。精神的な面で子供に残した影響という点で、災害というのはすごいものがあるんだなと。恐らく、自分の目の前で親がつぶされていったわけでしょう。自分は偶然助かったけれども、これは大変長くかかる仕事だろうなという話、向こうの中学校の先生方としてきたことある。あれ見ると、日本も災害国家ですからね。これもやっぱり同じ北海道民として、虻田の人たちがあれだけの被害を受けて、精神的な問題というのはすごい大きいなと思って、参加することにしました。ロシアであのときやった対策と、あとその前に1976年に中国の遼寧省海城市周辺ですごい地震があったのだけど、そのときの向こうの国家としての対応がどうだったか、そして日本はどうなのかという、そういう国際比較もやってみる必要があるのではないかというようなことを、今考えています。つまり、地震などの災害をそれぞれの地域なり、国家がどういう受けとめ方をして、どう対処してきたか。外国の例を見て、参考にしたり、研究したという例はこれまで少ないんじゃないかと思います。

出席すれば単位がもらえる？

―経済学部自己点検報告『教育と研究Ⅱ』「授業に関するアンケート集計結果」(2001年)より(2)

前号に続き、自己点検報告にある学生アンケートの結果についての教務関係の先生方の誌上対談です。第２回のテーマは、成績評価の問題です。定期試験を控え、学生にとっても関心のあるテーマだと思います。

A委員／「教育と研究Ⅱ」のアンケートの結果をみると、Ｑ１のとおり、まあ半数以上の学生は、成績評価は妥当なものと考えているようです。ただ、熱心に取り組んだ学生の中にも成績評価が妥当でない、と感じている者もかなりおります。これは、成績評価の「内容」より「形式」に対して納得できていない学生がいる結果なのではないか、と考えられます。特に、成績の内容に不満があるのじゃなく、熱心に出席しているのに、その努力が評価されない、という不満だと推測できます。

B委員／実際、Ｑ２をみると、評価項目で出席を重視してほしい、と希望する学生は多いです。

A委員／それは、学習の目標を見定められないことの現れともとれます。そのため、目に見える出席での評価を望むのではないでしょうか。「わからない」というのが多いのは講義に対する主体的な関わりの弱さと見られます。

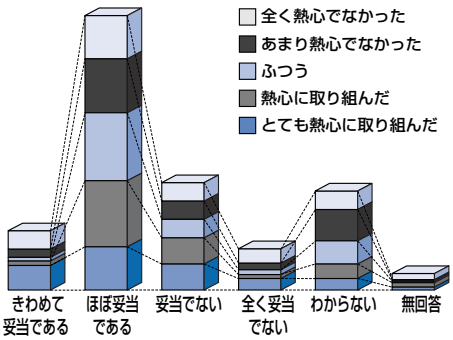
C委員／まあ、私どもも落としたくて落としてるんじゃない。極端に言えば、１回の試験で９割も合格するのは、八百長みたいなもんです。

D委員／僕も、出席したからといって単位をだすわけにはいかない、と考えます。

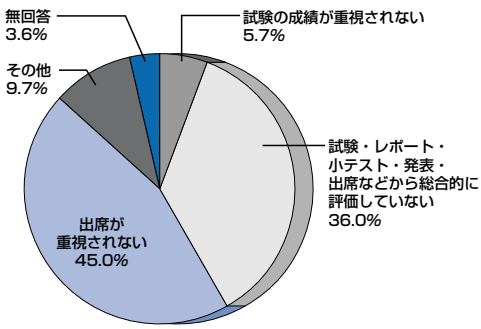
B委員／でも講義に出席していること自体、何かを求める学習に対する意欲・関心の現れ消極的な現れと見ることもできます。ですから、一概に否定できないんとちゃいますか。

D委員／そもそも、授業の目的は、教員が授業でこちらの意図するところを学生にきちんと理解させるということにあります。ですから、ある教育学者によると、成績評価は常に教師の自己評価のための情報収集である。なぜなら、授業・教育活動の中味は、教師によってのみなされるのであり、成績評価は教師の自己評価の結果を学生にフィードバックするため行うもの、と定義しています。出席のみでは、その点を確かめようがない。

Q1 成績評価の妥当性と講義への熱心度の分布



Q2 成績評価が妥当と思われない理由



B委員／すると、教師は常に成績評価の結果をまた講義に反映していく努力が求められる訳ですね。授業改善の不断の努力がいる、ということにもなります。実際、不可の学生が多いのは、十分理解させられない教師の力量の結果、ともいえる訳ですからね。

A委員／理解できない原因については、まだ公表していない最新の学内アンケート調査によると、「教員の努力不足と学生の努力不足が半々」という回答が５割、「どちらかと言えば学生の努力不足」と考えるのが３割で、逆に「どちらかと言えば教員の努力不足」と見ているのが２割です。結構、学生は自分の努力不足も自覚しています。授業方法の工夫とともに、個々の授業で到達目標を具体的に設定して学生に努力の方向を示すことも必要です。

B委員／教育の面でも「プロ」としてもっとこの点を自覚する必要がある。ただ、現状をみると学生が学習に充てる時間は決して多くない。まあ、授業だけが大学生の生活すべてやないけど…。

C委員／僕は、学習の目標を結構ハッキリ言っています。ですから、やっぱり学生が勉強してないんとちゃいますか。一生懸命やっている、という学生もいますが、もっと目標のために努力すべきで、授業中ボーッと聞いてプリントもらえばいいとか、試験の前に一夜漬けで勉強するだけでは、理解するのも無理ちゃいますか。

B委員／やっぱり学習にはいろんな意味で積み重ねと蓄積が必要です。特に基礎や初歩的理解が足りないことについても対策が求められていますが、やはり学習意欲のでる環境をつくることが重要です。自由があるのは大学の一つの魅力ですが、その中で、何のために学習するのかを模索しながら、一つ一つ手応えを感じ、力が積み上げられるような多層的な学習システムが求められているのではないでしょうか。

econ.（エコン）No.4　発行：北海学園大学経済学部　2001・夏

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1-40　TEL.011-841-1161　FAX.011-824-7729
HP.http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp　e-mail:admin-ec@econ.hokkai-s-u.ac.jp